

2017年8月13日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記3章16～28節

説教：神の知恵

はじめに

ソロモンは、父ダビデの跡を継ぎイスラエル王となります。普通ならこんな時、経験のない王のために後ろ盾となる者がいて補佐してくれるのですが、そのような人物はだれもいません。王の任務を果たすために必要な能力、あれもなければこれもない、足りないものが沢山ありすぎて、何から祈り求めてよいのかわからない状態でした。

そんなあるとき夢の中で神からの語りかけを聞きます。「あなたに何を与えようか。願え。」ソロモンがこの問いかけを聞いたとき、自分にとって最も必要なものは多くはない。いや、たった一つであることに気がつきます。そこでこう答えます。「善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。さもなければ、だれに、このおびたしいあなたの民をさばくことができるでしょうか。」

この願いは主の御心にかない、「わたしはあなたに知恵の心と判断する心とを与えよう」と約束してくださいました。ソロモンはこのようにしてイスラエルを治めていきます。ではその知恵とはどのようなものであったのか。今日の箇所が、その具体例です。これが神の知恵だと言っています。いったいどこが神の知恵なのでしょう。誰も思いつかない、あつと驚くようなさばき。それが神の知恵か。しかし、いつも言います。聖書は私たちの救いのために書かれています。一つとして無駄がない。ここにも救いが示されているはず。それはなにか、ともに考えていき

ます。

1 子を巡って争うふたりの女

1) 証言

あるときふたりの遊女がソロモンのところに来て、裁判を申し立てました。訴えの内容はこうです。一つの家にならぶふたりの女がいっしょに住んでいて、ほぼ同じ時期にふたりは子どもを産みます。原文を見るとどちらも男の子であることがわかります。ところがある夜のこと、事故によって一方の子どもが死んでしまいます。そこで死んだ子の母親は、夜の間こっそりと、もう片方の女のところに行き、生きていた子どもと取り替えてしまった。生きていた子どもは私の子どもだから、取り戻して欲しい。そういう訴えです。もちろん、訴えられた女の方も黙ってはいません。生きていた子どもは自分の子どもで、あなたの子どもは死んだのだと言って譲りません。

2) 決定的な証拠がない

訴えの内容そのものはそれほどむずかしくはありません。生きていた子どもはAのものか、それともBのものか、どちらか一つに決めればよいだけです。ところが、ふたりの女の証言は真向からぶつかり合っている。真実は一つしかありません。どちらかが本当のことを言い、どちらかが嘘を言っていることは明らかです。けれども目撃者がいません。決定的な証拠がないのです。そのことがこの裁判を難しいものになっています。ソ

ロモンはどうしたのでしょうか。

2 ソロモンがしたこと

1) 子どもを二つに断ち切れ

24、25 節。「王は、『剣をここに持ってきなさい』と命じた。剣が王の前に持ってこられると、王は言った。『生きている子どもを二つに断ち切り、半分をこちらに、半分をそちらに与えなさい。』」

もちろん最初から本気で、子どもを半分に断ち切ろうとしたわけではありません。この命令を聞いて、ふたりの女がどう応答するかを見極めようとしていたことは明らかです。

2) 母親の叫び

すぐに反応がありました。26 節。「すると、生きている子の母親は、自分子を哀れに思っ
て胸が熱くなり、王に申し立てて言った。『わが君。どうか、その生きている子をあの女にあげてください。決してその子を殺さないでください。』しかし、もうひとりの女は、『それを私のものにも、あなたのものにもしないで、断ち切ってください』と言った。」

生きている子どもの母親は、王の命令とは言え自分の子どもが目の前で殺されるのを黙って見ることができません。「決してその子を殺さないでください」と叫びます。

最初は、A が正しいのか、それとも B の言い分が正しいのかまったく判断できませんでした。しかしソロモンが語った不思議なことによってすべての真実が明らかとなりました。ソロモンは、生きている子どもを初めの女に与えるようにとの判決を下し、裁判は閉じられます。

3) 何が神の知恵なのか

神がソロモンに与えてくださった知恵とはなんのでしょうか。ただ人々が驚くような思いつかないアイデアのことを指して、神の知恵と言うのか。もしそうなら、最近は何でも驚くことに「神」とつけることが流行のようですが、それと同じことになります。最初にも触れたように、聖書は私たちの救いのために書かれているのですから、ただ驚いて終わりではないはずです。ここには救いに関して二つのことが記されています。

3 神の知恵

1) その 1 : さばき

まず一つ目。ふたりの女がソロモンの前に立って証言したとき、最初はどちらが本当のことを語り、どちらが嘘をついているのか、まったく判断できませんでした。心の奥底で何を考えているのか、ふたりの証言からだけではほとんど見えてきませんでした。

これは他人事ではありません。私たちはどんな世界に生きているのか。相手が何を考えているのかわからない。こちらも自分の心の中にあることを隠している。お互いにいやな思いをしないように愛想笑いをしながら適当に距離をとり、生きている。私たちは、まさにこのような世界に生きています。それはまだよいほうかもしれません。私たちの心の内には隣の人が持っているものをうらやましい思いがあります。自分にはないものを、盗んででも、嘘をついてでも手に入れようとする思いがあります。そんな思いを絶対に知らないよう隠している。それが私たちの現実です。

神はどうされるのでしょうか。神は知らないのでしょうか。あるいは知っているけれど見ない振りをするのか。いいえ。神は私たちの心

の内にあるものを白日のものとさらけ出します。無理矢理にはありません。ではどうやって。ソロモンはどうしたか。「生きている子どもを二つに断ち切りなさい。」このひとことで何が起きたか。嘘を言っていた女を見てください。この女にとっては、生きている子どもは自分のものでないので、どうなろうとも関係ありません。何も言わず黙っていればよかったです。しかし黙っていなかった。いや、黙ることができないのです。心の奥底に押し隠していた残酷な思いが口をついて出て来ます。自分の子どもが死んだこの悲しみを、相手の女にも味あわせてやりたい。それで「それを私のものにも、あなたのものにもしないで、断ち切ってください」と平然と言うのです。

今まで隠されていたもの。絶対に人に知られたくないこと。そのことがたちどころに表に現れてくる。これが神の知恵であり、神のさばきです。

2) その2：救い

もし話がここで終わりならば救いはありません。この女のように嘘をついてきた、本当のことを隠してきた自分はどうなるのか。神の怒りに触れて厳しくさばかれておしまい。神は怖い方という印象で終わりです。そんなはずはない。どこかに救いのあるはずです。それが神の知恵の二つ目になります。

26節をもう一度読みます。「すると、生きていた子の母親は、自分の子を哀れに思って胸が熱くなり、王に申し立てて言った。『わが君。どうか、その生きていた子をあの女にあげてください。決してその子を殺さないでください。』」

自分の子どもが目の前で二つに断ち切ら

れるのを黙って見ている母親はいないでしょう。どんな母親も、「決してその子を殺さないでください」と叫ぶでしょう。そこまではわかる。

では、次のことばはどうでしょうか。「その生きていた子をあの女にあげてください。」誰でも言えることばでしょうか。自分の子どもを寝ている間にこっそりと盗み、死んだ子どもと取り替えた相手です。そんな相手に自分の息子を与える事ができますか。むしろ、こんなひどいことをする者は絶対に赦さない。そう思うのではないですか。「その子を殺さないで」と言えたとしても、「あの女にあげてください」とまで言えないでしょう。ところがなぜかこの母親は、あの女にあげてもよいと語るのです。子どもが助かるのなら、そこまでしてもかまわないと言うのです。

ぎりぎりのところに立たされた母親が叫んだことば。実はこのことばの中に神の知恵が輝いています。この母親は、神が私たちを救うとき、何をしてくださるのか、二つのことを語っていたのです。

①ひとり子を罪の世に与える神

一つ目。「その生きていた子をあの女にあげてください。」自分の愛する子を、自分に対して罪を犯した相手にあげてもよい。愛する子を手放してもいいから救いたいと願った。いったい誰を救うのか。もちろん子どもを救うためです。でも、それだけか。もしこの母親の言うとおりにしたなら、何が起きますか。罪を犯したほうの女はどうなるか。さばかれることはありません。無罪放免です。母親はそうなってもかまわないと言っています。

これと同じ話、どこかにありませんでした

か。父なる神は、ひとり子を誰に与えたのですか。神に対して罪を犯した私たちに与えてくださった。なぜですか。私たちがさばかれないためです。その子どもはどうなったか。十字架で二つに裂かれました。父なる神はどうしたか。イエス・キリストを十字架につけた私たちにさばいたか。さばかない。なぜか。わたしの子どもをあなたに与える。それであなたは無罪放免となる。母親が語った神の知恵のとおりです。

②ひとり子をよみがえらせてくださる神

神の救いについての二つ目。ソロモンは母親のことばを聞き、どうしたか。27節。「生きている子どもを初めの女に与えなさい。決してその子を殺してはならない。」

このことばも父なる神と子なるイエス・キリストに当てはめることができます。父はひとり子を罪の世に遣わし、与えてくださいました。そのひとり子は十字架で死なれます。死んで終わりなら救いはありません。でもソロモンが語ったことばは私たちの救いです。子どもは殺されてはならないのです。生きたまま母親に戻さなければなりません。それは何を意味するか。神の子は十字架で死ぬけれど、必ずよみがえることを示します。よみがえられたひとり子は父に戻ることを示します。その約束だったのです。これが神の知恵だったのです。

ここにあるのは、ひとりの子どもを巡るふたりの女の争いではありません。神は私たちがどのように救おうとされているのか、罪と罪とが相争うようなところにおいてもはっきりと示されていく。これこそが神の知恵なのだ、きょう聖書が語っています。